

朝日遺跡出土パレススタイル壺・ 太頸壺のデザイン

● 蔭山誠一

愛知県清須市・名古屋市西区の朝日遺跡において、弥生時代後期の遺構から出土した太頸壺の頸部形態と体部形態の分析を行った。その結果、弥生時代後期前葉から後葉にかけてのパレススタイル壺・太頸壺において、体部幅が大きい太頸壺 A では頸部形態の外傾化と体部形態の最大幅の位置が比較的低位置に維持される傾向が、体部幅が小さい太頸壺 B では頸部形態の外傾化と体部形態の最大幅の位置の高位置への変化の2つの傾向がみられることを指摘した。この2つの傾向を受けて朝日遺跡の出土遺物を代表するパレススタイル壺が形成されることを想定した。

1. はじめに

本稿は、愛知県清須市・名古屋市西区に所在する朝日遺跡の弥生時代後期から古墳時代前期の遺構から出土したパレススタイル壺・太頸壺の器形と文様構成、底部・口縁部の形態について、各分類した形態・文様構成が共伴する関係の変遷を検討するものである。

東海地域におけるパレススタイル土器は、濱田耕作が尾張熱田貝塚などの出土品をギリシャのクノッソスのパレス式土器になぞらえたことに由来し（濱田 1929）、その後小林行雄により伊勢湾沿岸地域の赤彩と文様を持つ壺形土器を「宮廷土器（パレススタイル）」と呼称したことにより定着した（小林 1939）。現在では、浅井和宏が指摘した広義には濃尾地方の赤彩土器を、狭義には濃尾地方を中心に分布する赤彩広口壺を指すという認識がみられる（浅井 1986・1987）。

パレススタイル土器の研究は弥生土器から古式土師器の編年研究の中で言及されるものが多くあり（大参 1968、赤塚 1990・1992・1993・2001、石黒 1987、永井・村木 2002、宮腰 2004）、土器編年の時期区分との関係から赤彩土器のある器形や組成などに言及された。パレススタイル壺について主に分類・分析を行ったのは先に述べた浅井の研究が始まりで、赤彩広口壺の口縁部形態と体部形態、体部上半の文様構成からパレススタイル壺の特徴を明らかにし、その分布からパレススタイル土器の成立し

た地域と盛行した地域、遠隔地への伝播について高杯・S字状口縁台付甕の分布範囲との類似性などを指摘した（浅井 1987）。また、宮腰健司は柳ヶ坪型土器を分析する際にパレススタイル壺の形態との差異を確認している（宮腰 2016）。

パレススタイル土器の性格については、赤彩土器が方形周溝墓の周溝から残存状況の良い資料が多数確認されていることや土器への赤彩行為の存在などから葬送儀礼などの祭祀用の土器である推定が多くある。一方、村木 誠は器種組成などの分析から、出現期には壺よりも高杯などの個人用食器に赤彩が施される傾向が認められることから、住居や方形周溝墓における共食の場で、他者との序列を視覚的に強調する役割を担った可能性が指摘した（村木 2004）。最近、白川美冬による朝日遺跡出土の赤彩土器全般の器種組成や出土遺構の性格、土器胎土の色調、赤彩の色調、赤彩文様、ミガキ調整との関係など多岐にわたる分析がなされ、パレススタイル土器の役割として階層性との関係がないこと、弥生時代後期初頭の周辺遺跡を含めた遺跡の変遷から、土器の遺跡間移動に伴う利用形態に関わる自己表現との関係を想定されている（白川 2026）。他には土器の赤彩の意義について、貯蔵時における気密性の向上や液漏れ防止といった実用的機能の推定がされた（森本 1934）。

パレススタイル土器の赤彩顔料の特定について、赤彩材料には水銀朱とベンガラがあるが、堀木真美子は、朝日遺跡などで出土した赤彩土

器について蛍光X線（定性）分析を行い、赤彩材料は全てベンガラ（酸化鉄）であり、微量元素として銅、鉛、水銀朱が含まれることを確認した。ベンガラ中のヒ素、銅の抽出されたものについては、岐阜県大垣市の金生山産のベンガラである可能性について指摘がある（堀木 2008）。

土器の胎土分析では、「パレススタイル」土器について、火山ガラスを多く含むものが一定数存在することが指摘されており（永草 1992・2026、車崎他 1996、藤根 1998 など）、土器制作にかかわる粘土採取と混和材としての砂礫採取について検討がなされている。

本分析では、太頸壺の形態について型式分類を行い、頸部形態と体部形態の各分類に伴う文様構成や口縁部形態、底部の形態の関係について検討し、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての太頸壺の変遷について分析したい。なお、本稿で扱うパレススタイル土器・壺は、主にベンガラを用いた焼成前彩色のものについて扱い、本分析で主に分析・引用した資料は、朝日遺跡報告書で、本文・図の中にある「Ⅰ」・「Ⅱ」・「Ⅲ」・「Ⅳ」・「Ⅴ」・「Ⅵ」・「Ⅶ」・「Ⅷ」は各報告書によるも

のである⁽¹⁾。

2. 弥生時代後期の太頸壺の型式分類

(1) 太頸壺の形態分類

本論で主に取り扱う弥生時代後期の弥生土器では、弥生時代中期の細頸壺と太頸壺の組成から太頸壺の器形（頸部径 7cm 以上、体部径 16cm 以上）のみとなり、口縁部が頸部から外反して開くものが主体となる。太頸壺のなかでは、体部径が 24.0cm 以上のものを太頸壺 A、体部径が 16.0cm ～ 23.9cm のやや細身の太頸壺 B に分類する。ここでは、朝日遺跡出土の太頸壺で全体の器形を中心に検討するため、報告された太頸壺のうち頸部形態と体部形態の形態がわかるもの太頸壺 A が 89 点、太頸壺 B が 88 点の計 177 点について検討した。

まず太頸壺の器形について分析するため、口縁部・頸部・体部・底部の各形態について型式分類を行う。

○口縁部形態の分類

口縁部 a：外面端部が端面をもっておわるもの、丸みをおびておわるもの。

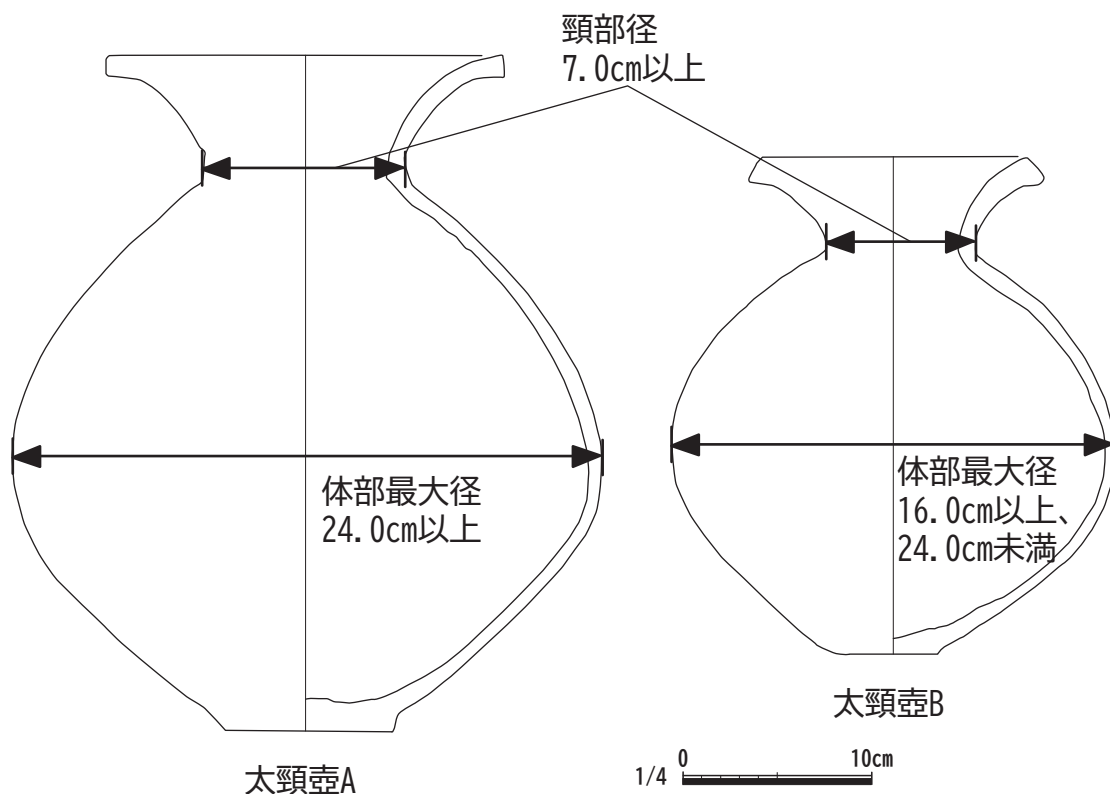
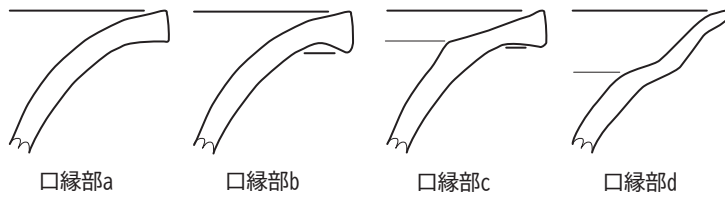
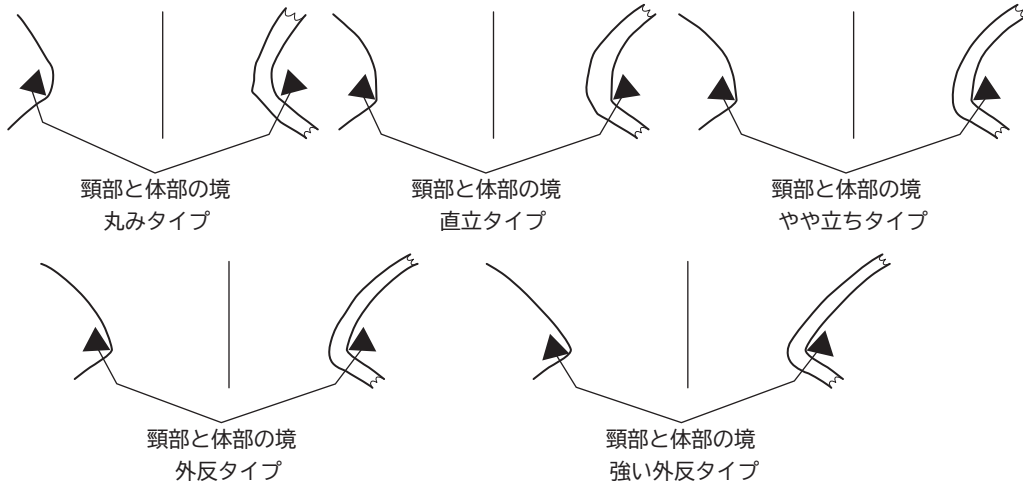


図1 太頸壺 A と太頸壺 B

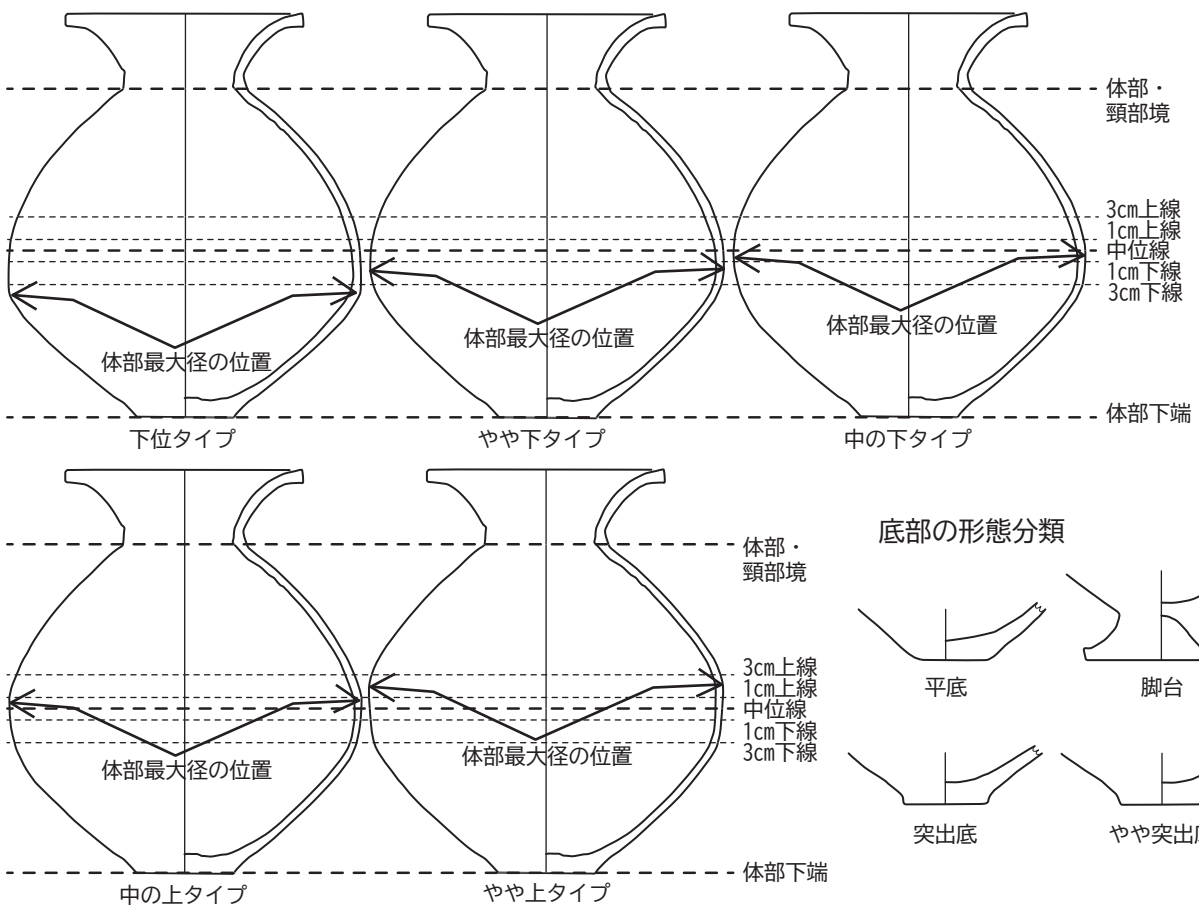
口縁部の形態分類



頸部の形態分類（体部から頸部の立ち上がりの角度により分類。）



体部の形態分類（体部最大径の位置、体部中位からの距離により分類、脚台の高さを含まない。）



底部の形態分類

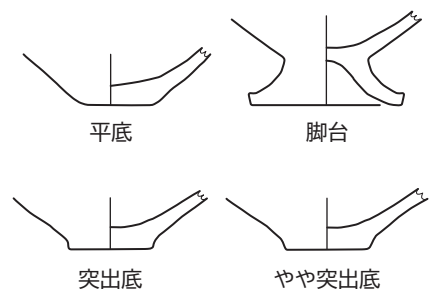
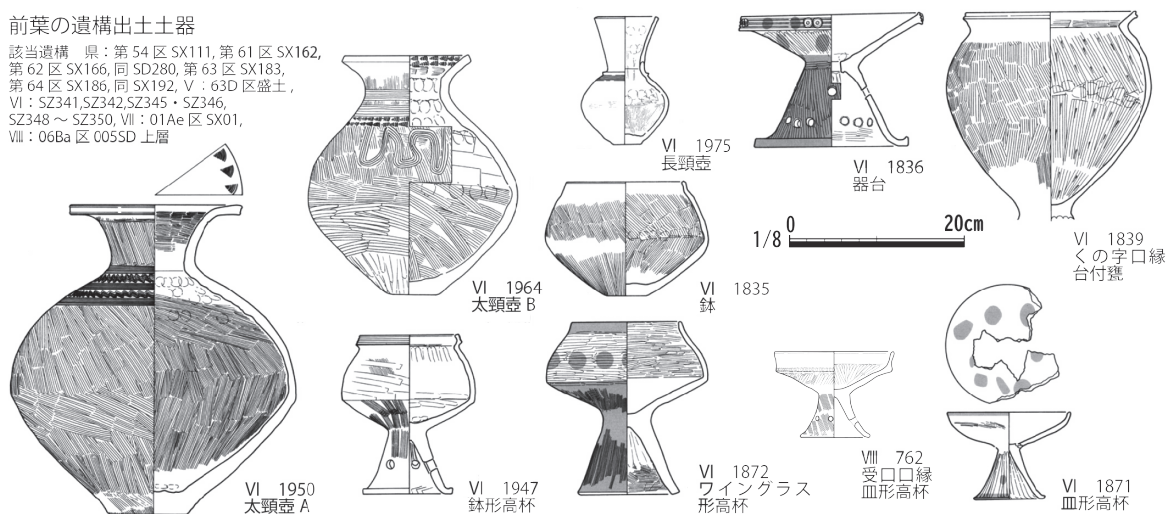


図2 太頸壺の形態分類

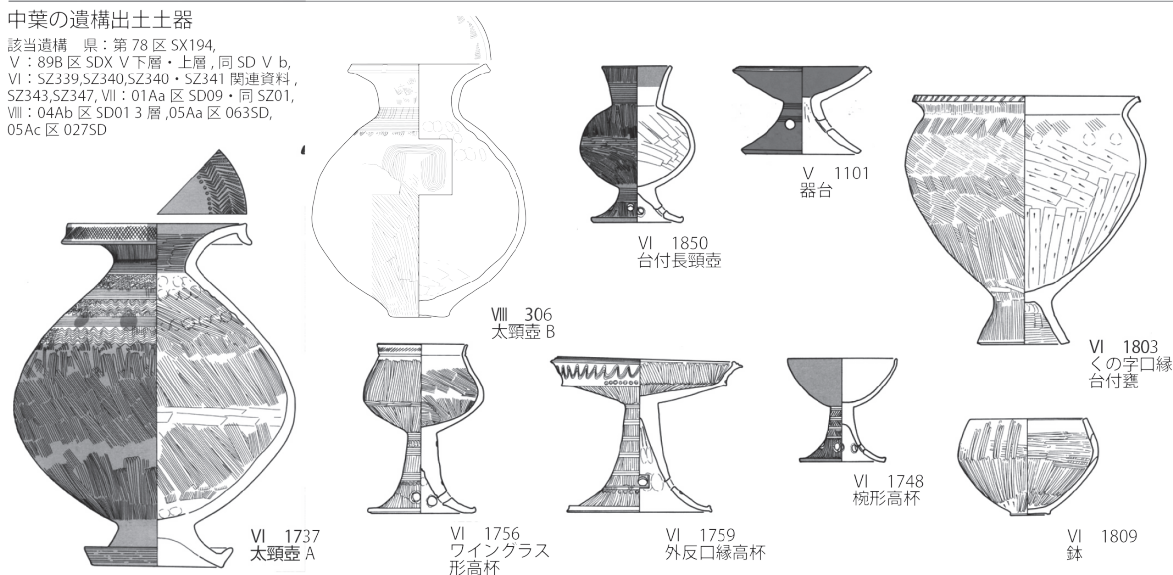
前葉の遺構出土土器

該当遺構 県：第54区 SX111, 第61区 SX162, 第62区 SX166, 同SD280, 第63区 SX183, 第64区 SX186, 同SX192, V：63D区盛土, VI：SZ341, SZ342, SZ345・SZ346, SZ348～SZ350, VII：01Ae区 SX01, VIII：06Ba区 C05SD上層



中葉の遺構出土土器

該当遺構 県：第78区 SX194, V：89B区 SDX V下層・上層, 同SD V b, VI：SZ339, SZ340, SZ340・SZ341 関連資料, SZ343, SZ347, VII：01Aa区 SD09・同SZ01, VIII：04Ab区 SD01 3層, 05Aa区 063SD, 05Ac区 027SD



後葉の遺構出土土器

該当遺構 県：第6・7区 080SD, 第21区 178, 第23区 177SD又は178SD, 第25区 SX102, 第45区 SD178, 同SX105, 第72区 SD366, 同SD367, 第79区 SD371, V：SZ162下層, 61H区西SD VII, SZ301北構, SD156, 62I区 SE01下層, 61H区東SD V・VI・VII, 61D区 SD IX, 60A区 SD VII, VII：01Aa区 SD02・同SD04・同SD08, VIII：04Ab区 SD01 2層・同SD02 2層, 05Aa区 001SU, 05Cc区 SD01, 05Ce区 004SB

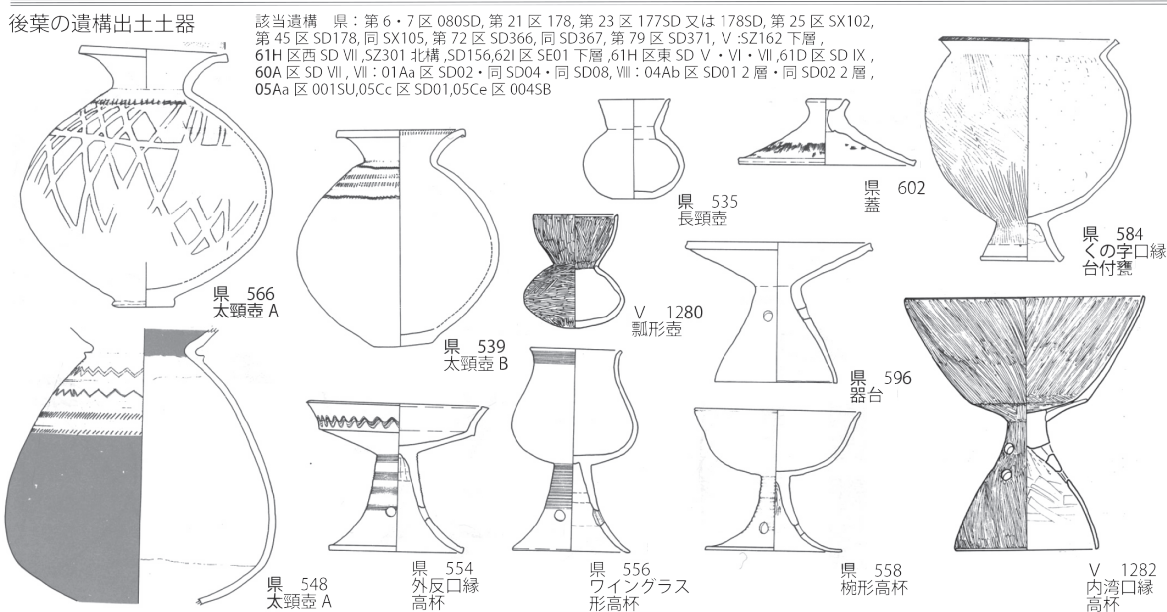


図3 弥生時代後期の前葉～後葉の土器 (1:8)

口縁部 b：外面端部がやや幅広の端面となるもので、口縁部下端側が垂下するもの。

口縁部 c：口縁部端面の下端が垂下するものが多いが、さらに内面に段をもち、口縁部に比較的平坦な面ができるもの。

口縁部 d：口縁部が一度内面側に屈折してさらに外反して開くもの。

○頸部形態の分類

体部と頸部の境から口縁部に立ち上がる形態により頸部形態を分類する。

丸みタイプ：頸部が体部から内側に丸みをもったたちあがり、口縁部がひらくもの。

直立タイプ：頸部が体部からほぼ真上（外側に 5 度未満）にたちあがり、口縁部がひらくもの。

やや立ちタイプ：頸部が体部からやや外側に傾いて（外側に 5 度以上、15 度未満）たちあがり、口縁部がひらくもの。

外反タイプ：頸部が体部から外側に傾いて（15 度以上、25 度未満）たちあがり、口縁部がひらくもの。

強い外反タイプ：頸部が体部から外側に強く傾いて（25 度以上）たちあがり、口縁部がひらくもの。

○体部形態の分類

体部の最大径のある位置の相対的高さにより分類する。体部の高さは体部から頸部境までの範囲で体部最大径のある高さについて分類する。底部については脚台の範囲を含めない。底部や頸部が欠損しているものでも分類可能のものについては分類した。

下位タイプ：体部最大径の位置が体部中央より 3.0cm 以上下位にあるもの。

やや下タイプ：体部最大径の位置が体部中央より 1.0cm 以上、3.0cm 未満下位にあるもの。

中の下タイプ：体部最大径の位置が体部中央より 1.0cm 未満の下位にあるもの。

中の上タイプ：体部最大径の位置が体部中央より 1.0cm 未満の上位にあるもの。

やや上タイプ：体部最大径の位置が体部中央より 1.0cm 以上の上位にあるもの。

○底部形態の分類

底部の形態により分類する。

平底：底部がそのまま終わるもの。

脚台：脚台があるもの。

突出底：底部が下方に突出するもの。

やや突出底：底部が下方にやや突出するもの。突出がやや不明瞭なもの。

(2) 太頸壺が出土した遺構の時期区分

土器が出土した遺構の時期区分は、朝日遺跡の遺構において共伴して出土する土器（器形）を基準に弥生時代後期を三区区分する（図 1）。

○弥生時代後期前葉（以下「前葉」という）：くの字口縁台付甕・太頸壺・長頸壺・直口壺・鉢形高杯・ワイングラス形高杯（鉢形高杯の杯部下半の丸みを帯びたもの）・皿形高杯（皿形のものと受口の皿形のもの）・椀形高杯・器台などを主体に出土する遺構。

○弥生時代後期中葉（以下「中葉」という）：弥生時代後期前半の器形に外反口縁高杯が加わり、皿形高杯・鉢形高杯がなくなる遺構。

○弥生時代後期後葉（以下「後葉」という、古墳時代前期前半を含む）：弥生時代後期中葉の器形に内湾口縁高杯・瓢形壺が出土する遺構。古墳時代前期前半の S 字状口縁台付甕が出土する遺構を含むものとする。

○その他の弥生時代後期のもの（以下「不明」という）：共伴して土器が出土していない遺構、本論で時期区分の参考とする器形の土器が出土していない遺構、包含層など共伴土器の出土が不明なもの。

3. 太頸壺の頸部形態と体部形態の変化

(1) 太頸壺 A の傾向（表 1）

まず、太頸壺 A の頸部形態丸みタイプは 25 点あり、体部形態下位のものは 1 点、体部形態やや下のものは 6 点、体部形態中の下のものは 13 点、体部形態中の上のものは 4 点、体部形態やや上のものは 1 点があり、体部形態やや下と中の下のものが多い。共伴する土器の時期も前葉が 17 点、中葉が 4 点で、前葉の形態のものと思われる。

頸部形態直立タイプは 12 点あり、体部形態やや下のものから体部形態やや上のものまである。前葉の体部形態中の上のもの 3 点と後葉の体部形態やや下のもの 4 点あるのが注目される。

頸部形態やや立ちのものは 15 点あり、体部

表1 太頸壺Aの頸部形態と体部形態

太顕壺A	下位				やや下				中の下				中の上				やや上			
	前葉	中葉	後葉	不明	前葉	中葉	後葉	不明	前葉	中葉	後葉	不明	前葉	中葉	後葉	不明	前葉	中葉	後葉	不明
丸み	1				5	1			9	1		3	2	2						1
直立							4		1	1	1		3				1		1	
やや立ち						1	4	2	1		3		1		1	1				1
外反				1			2	2	1		1	3		3		7		1	1	
強い外反					1	1	6	3				1			1				2	

表 2 太頸壺 B の頸部形態と体部形態

太顎壺B	下位				やや下				中の下				中の上				やや上			
	前葉	中葉	後葉	不明	前葉	中葉	後葉	不明	前葉	中葉	後葉	不明	前葉	中葉	後葉	不明	前葉	中葉	後葉	不明
丸み							1		3	2	1		4	1	3					
直立						1	1		2	1			2	3						
やや立ち					1	2	1	1	1	3	7			3	7	1				1
外反					1		4	2	2	2	8	2		2	3					
強い外反						1	2				2	2			2					

形態やや下のものからやや上のものである。前葉の体部形態中の下のもの中の上のものが各1点、中葉の体部形態中の下のものが1点ある。後葉のもので体部形態やや下のものが4点と中の下のものが3点と多くみられる。

頸部形態外反タイプは 22 点あり、体部形態下位のものから体部形態やや上のものまである。詳細な時期は不明のことが多いが、前葉では中の下のが 1 点ある。中葉のものでは体部形態中の上のが 3 点とやや上のが 1 点あり、後葉のものでは体部形態やや下のが 2 点と体部形態中の下のもの 1 点、体部形態やや上のが 1 点ある。

頸部形態強い外反タイプは15点あり、前葉の体部形態やや下のもの1点、中葉の体部形態やや下のもの1点、後葉の体部形態やや下のもの6点と体部形態中の上のもの1点、体部形態やや上のもの2点がある。

太頸壺 A では、前葉では頸部形態丸みタイプと直立タイプが多く、体部形態もやや下のものから中の下のもものと中の上のものに主体がある。後葉では頸部形態直立タイプから強い外反タイプまであり、体部形態やや下のもの・中の下のもものと体部形態やや上のものに分かれる傾向がある。中葉では頸部形態丸みタイプから強い外反タイプまであり、体部形態においてもやや下のものからやや上のものであまり偏りがない。

(2) 太頸壺Bの傾向 (表 2)

次に太頸壺Bの頸部形態丸みタイプのものは15点あり、体部形態やや下のものは1点、体部形態中の下のものは6点、体部形態中の上のものは8点があり、体部形態中の下のもとの中の上のものが多い。共存する土器の時期も前葉が7点と多いが、中葉が3点、後葉が4点と全時期にみられる。

頸部形態直立タイプは 10 点あり、体部形態やや下のものは中葉の 1 点、後葉の 1 点、体部形態中の下のは前葉の 2 点、中葉 1 点、体部形態中の上のものは前葉の 2 点、中葉の 3 点があり、前葉と中葉の時期に体部形態中の下と中の上のものが多くみられる。

頸部形態やや立ちタイプは 28 点あり、体部形態やや下のものは前葉の 1 点と中葉の 2 点、後葉の 1 点、体部形態中の下のは前葉の 1 点、中葉の 3 点、後葉の 7 点、体部形態中の上のものは中葉の 3 点、後葉の 7 点、体部形態やや上のは後葉の 1 点がある。中葉と後葉では、体部形態中の下のもの中の上のもの、やや上のもに主体がある。

頸部形態外反タイプは 26 点あり、後葉の遺構から出土したものが 15 点と多い。体部形態ではやや下のものは前葉の 1 点と後葉の 4 点、中の下のは前葉の 2 点、中葉の 2 点、後葉の 8 点、中の上のものは中葉の 2 点、後葉の 3 点がある。体部形態中の下のものが多い。後葉のものでは、頸部形態やや立ちタイプに比べると体部形態中の上のものが減り、体部形態中の

表 3 太頸壺Aの器形と口縁部形態

太頸壺A		口縁部形態a				口縁部形態b				口縁部形態c				口縁部形態d			
		前葉	中葉	後葉	不明	前葉	中葉	後葉	不明	前葉	中葉	後葉	不明	前葉	中葉	後葉	不明
丸み	下位					1											
	やや下	5				1											
	中の下	6			1	1	1		2								
	中の上					1	1										
	やや上																
直立	下位																
	やや下		1	2		1		1				1					
	中の下	2				1											
	中の上	1		1													
	やや上																
やや立ち	下位																
	やや下			1			1	1	1								
	中の下		1			1		2				1					
	中の上			1					1								
	やや上								1								
外反	下位				1												
	やや下			1				1	1								
	中の下	1			1			1	2								
	中の上		1		4				1				1				
	やや上			1													
強い外反	下位																
	やや下	1		2	1		1					2				2	2
	中の下																
	中の上																
	やや上			2													

下のものからやや下のものに主体が移る。

頸部形態強い外反タイプは9点あり、中葉の体部形態やや下のもの1点、後葉の体部形態やや下のもの2点と体部形態中の下のが2点、体部形態中の上のものが2点がある。

太頸壺Bは、前葉では頸部形態丸みタイプと直立タイプが多く、体部形態中の下のものの中の上のものに主体がある。後葉では頸部形態やや立ちタイプで体部形態中の下のものの中の上のもの、頸部形態外反タイプで体部形態中の下のものが多い。中葉では前葉のものと後葉のものの中間の状況がみられる。

(3) 小結

以上の太頸壺Aと太頸壺Bの傾向をあわせて検討すると、前葉では太頸壺Aの頸部形態丸みタイプで体部形態やや下のもの・中の下ものから、頸部形態直立タイプで体部形態中の上のもの、太頸壺Bの頸部形態丸みタイプ・直立タイプで体部形態中の下のものの中の上のものに主体がある。

後葉では太頸壺Aでは、頸部形態直立タイプから、頸部形態強い外反タイプまで比較的多くみられ、強い外反タイプが特に多くある。また体部形態ではやや下のもの・中の下のものとは体部形態やや上のものに分かれて存在する。太頸壺Bでは、頸部形態やや立ちタイプ・外反タイプで多く、頸部形態やや立ちタイプと外反タイプを比較すると体部形態の主体が中の下のもの・中の上のものから中の下のもの・やや下のものに変化する。

表 4 太頸壺Bの器形と口縁部形態

太頸壺B		口縁部形態a				口縁部形態b				口縁部形態c				口縁部形態d			
		前葉	中葉	後葉	不明	前葉	中葉	後葉	不明	前葉	中葉	後葉	不明	前葉	中葉	後葉	不明
丸み	下位																
	やや下			1													
	中の下	2	2														
	中の上	3	1	3													
	やや上																
直立	下位																
	やや下				1			1									
	中の下	1		1													
	中の上		3														
	やや上																
やや立ち	下位																
	やや下	1	1		1												
	中の下		2	5													
	中の上	1	3	6	1			1									
	やや上			1													
外反	下位																
	やや下	1						1				1	1				
	中の下	1	2	5	2	1		2									
	中の上		2	3													
	やや上																
強い外反	下位																
	やや下			2			1										
	中の下			2	1												
	中の上			2													
	やや上			1													

4. 器形と口縁部・底部形態の関係

- (1) 太頸壺の器形変化と口縁部形態の関係
先に分類した口縁部形態の時期的変化と器

表 5 太頸壺Aの器形と底部形態

太頸壺A		脚台				突出底				やや突出底				平底			
		前葉	中葉	後葉	不明	前葉	中葉	後葉	不明	前葉	中葉	後葉	不明	前葉	中葉	後葉	不明
丸み	下位									1							
	やや下	1	1			2								2			
	中の下					2			1	1			1	5			1
	中の上					1								1	2		
	やや上																1
直立	下位																
	やや下	1						1								2	
	中の下						1							1		1	
	中の上					1				1				1			
	やや上							1						1			
やや立ち	下位																
	やや下			2				1		1						1	1
	中の下							1						1		2	
	中の上							1	1								1
	やや上																1
外反	下位																1
	やや下							1	1			1	1				1
	中の下					1		1									5
	中の上								3								
	やや上						1	1						1			
強い外反	下位																
	やや下		1			1		4	1							2	2
	中の下								1								
	中の上			1													
	やや上			1				1									

表 6 太頸壺Bの器形と底部形態

太頸壺B		脚台				突出底				やや突出底				平底			
		前葉	中葉	後葉	不明	前葉	中葉	後葉	不明	前葉	中葉	後葉	不明	前葉	中葉	後葉	不明
丸み	下位																
	やや下							1									
	中の下						2							3		1	
	中の上					2	1	2						2		1	
	やや上																
直立	下位																
	やや下			1											1		
	中の下					1								1	1	1	
	中の上													2	3		
	やや上																
やや立ち	下位																
	やや下					1									2	1	1
	中の下						1	3						1	2	4	
	中の上		1				1	1				3		1	1	4	1
	やや上							1									
外反	下位																
	やや下					1		2	1							2	
	中の下					1		1	2					1	3		
	中の上															1	
	やや上																
強い外反	下位																
	やや下																
	中の下																
	中の上															1	
	やや上							1									

形との関係を検討する(表3・表4)。口縁部aは太頸壺Aにおいて前葉で16点、中葉で3点、後葉で11点、不明で8点、太頸壺Bにおいて前葉で10点、中葉で16点、後葉で32点、不明で6点と他の形態に比べて多数確認でき、多

くの器形のタイプにみられるものである。口縁部bは太頸壺Aにおいて前葉で7点、中葉で4点、後葉で6点、不明で9点、太頸壺Bにおいて前葉で1点、中葉で1点、後葉で5点と口縁部aに比べて少なくなり、太頸壺Aでは比較的確認できるが太頸壺Bでは少ない。前葉では太頸壺Aの口縁部aでは、頸部形態丸みタイプで体部形態やや下のもの中の下のものが特に多くあり、中葉から後葉にかけて頸部形態では直立タイプ、やや立ちタイプ、外反タイプ、強い外反タイプで多様な体部形態で少数ずつみられる。太頸壺Aの口縁部bにおいても確認できる数量は少なくなるが、ほぼ同じ傾向がみられる。太頸壺Bでは前葉から中葉にかけて特定の口縁部形態と組み合う頸部形態と体部形態はないが、後葉には頸部形態やや立ちタイプと外反タイプで体部形態中の下のもの中の上のものが多い。

口縁部cでは後葉の遺構出土の太頸壺A4点、太頸壺B1点と不明の遺構出土の太頸壺A1点、太頸壺B1点と非常に少なくなる。太頸壺Aの頸部形態直立タイプで体部形態やや下のもの1点、やや立ちタイプで中の下のもの1点、外反タイプで中の上のもの1点、強い外反タイプでやや下のもの2点、太頸壺Bの外反タイプでやや下のもの2点がみられる。

口縁部dは後葉と不明の遺構出土で太頸壺Aの頸部形態強い外反タイプで体部形態やや下のもの4点がみられる。

(2) 太頸壺の器形変化と底部形態の関係

先に分類した底部形態の時期的変化と器形との関係を検討する(表5・表6)。底部形態平底は太頸壺Aが37点、太頸壺Bが42点ある。太頸壺Aでは前葉に13点、中葉に2点、後葉に8点、不明に14点、太頸壺Bでは前葉に10点、中葉に11点、後葉に19点、不明に2点と多数確認でき、多くの器形のタイプにみられるものである。

脚台がつくものは、太頸壺Aが8点、太頸壺Bが2点と少ない。太頸壺Aでは前葉の頸部形態丸みタイプで体部形態やや下のもの1点、直立タイプでやや下のもの1点、中葉の頸部形態丸みタイプで体部形態やや下のもの1点、強い外反タイプでやや下のもの1点、後葉の頸部形態やや立ちタイプで体部形態やや下のもの2点、強い外反タイプで中の上のもの1点、強い外反タイプでやや上のもの1点がある。太頸壺Bでは中葉の頸部形態やや立ちタイプで体部形態中の上のもの1点、後葉の直立タイプでやや下のもの1点がみられる。脚台は器形の変化と同じく前葉・中葉の頸部形態丸みタイプ・直立タイプで体部形態やや下のものから中葉・後葉の頸部形態やや立ちタイプ・強い外反タイプで体部形態やや下のもの・中の上のもの・やや上のものにみられる。

底部が突出底のものは太頸壺Aが31点、太頸壺Bが26点ある。太頸壺Aでは前葉に8点、中葉に2点、後葉に13点、不明に8点、太頸壺Bでは前葉に6点、中葉に5点、後葉に12点、不明3点とどちらの器形においても同様な出土傾向がみられる。底部平底のものと比較すると、前葉のものが少ないが、器形との関係も平底のものと同様な傾向がみられる。

底部がやや突出底のものは太頸壺Aが7点、太頸壺Bが3点と少ない。その内訳は太頸壺Aが前葉に頸部形態丸みタイプで体部形態下位のもの1点、丸みタイプで中下のもの1点、直立タイプで中の上のもの1点、中葉に頸部形態やや立ちタイプで体部形態やや下のもの1点、後葉に頸部形態外反タイプで体部形態やや下のもの1点、不明に頸部形態丸みタイプで体部形態中下のもの1点、外反タイプでやや下のもの1点がみられる。太頸壺Bは後葉に頸部形態やや立ちタイプで体部形態中の上のもの3点で

ある。点数は少ないが、底部突出底と同様の傾向がみられる。

底部の形態は平底のものと突出底・やや突出底のものがほぼ同数あり、脚台が付くものが少数みられる。分析した資料点数にも関係するが、突出底のものが前葉に比べて後葉にやや増える状況がみられる。

5. 器形の変化と文様の関係

(1) 太頸壺に確認できる文様

次に先に述べた太頸壺A・太頸壺Bの器形の変化と土器の施された文様の種類との対応関係を検討する。太頸壺の文様は、櫛状工具による施文部分とその間を埋めるミガキ調整が多用され、ミガキ調整される部分には主にベンガラによる赤彩が施されるものがある。

櫛状工具を主とする施文方法をみると、口縁部には外面口縁部端面に凹線文(沈線直線文)・櫛描直線文・櫛による刺突文列・垂下浮文・円形浮文があり、口縁部から頸部には櫛描直線文が少しみられ、頸部に櫛描直線文・同簾状文・同斜め刺突文列・突帯(円形刺突文列を伴う場合がある)がみられる。内面には口縁部側から櫛による斜め刺突文列が1列～6列並び、彩杉文状に施される場合も多い。その他に櫛描直線文・同波状文・同扇形文列・円形刺突文などが比較的多く確認でき、円形浮文などもある。外面体部上半には櫛描直線文・同波状文・同簾状文・同扇形文列・同斜め刺突文列・円形刺突文列・突帯が多く確認でき、これらの文様が交互に施されるものがみられる。

(2) 器形と体部上半の文様構成の関係

先に検討した太頸壺の器形変化について、パレススタイル壺の主要な分類要素である外面体部上半の文様構成との関係を太頸壺Aと太頸壺Bについてそれぞれ検討する。先に述べた外面体部上半に施された文様の内、櫛描直線文・同波状文・同斜め刺突文列の組み合わせにより3類に分類する。

直・波タイプ：櫛描直線文と櫛描波状文を交互に施すもの。

直・波・刺タイプ：櫛描直線文と同波状文・同斜め刺突文列を交互に施すもの。櫛描直線文、

表 7 太頸壺Aの器形と外面体部上半の文様構成

太頸壺A		直・波タイプ				直・波・刺タイプ				無文タイプ			
		前葉	中葉	後葉	不明	前葉	中葉	後葉	不明	前葉	中葉	後葉	不明
丸み	下位	1											
	やや下	2①									①		
	中の下	4	①					2①		2			
	中の上	1								①	2		
直立	やや上				1								
	下位												
	やや下											4	
	中の下	1						1			1		
やや立ち	中の上	2								1			
	やや上									1	1		
	下位												
	やや下		1	1	①			2①				1	
外反	中の下			1						1		2	
	中の上				2						2		1
	やや上										1		1
	下位												1
強い外反	やや下							1	①/2			1	
	中の下			1					2①				
	中の上	1	1						①				5
	やや上										1		

*○数字は赤彩土器、○太数字は文様赤彩のある土器

表 8 太頸壺Bの器形と外面体部上半の文様構成

太頸壺B		直・波タイプ				直・波・刺タイプ				無文タイプ			
		前葉	中葉	後葉	不明	前葉	中葉	後葉	不明	前葉	中葉	後葉	不明
丸み	下位												
	やや下												
	中の下	①				①		1		1	1		
	中の上	1	1	1						3		2	
直立	やや上												
	下位												
	やや下							①			1		
	中の下	1	1							1		1	
やや立ち	中の上		1							2	2		
	やや上												
	下位												
	やや下		1①		1	1							1
外反	中の下	1		①							3	4①	
	中の上		1					①/1		1	4	5	
	やや上											1	
	下位												
強い外反	やや下				①			①		1		2	1
	中の下							①		2	2	6	2
	中の上							1			2	2	
	やや上												

*○数字は赤彩土器、○太数字は文様赤彩のある土器

あるいは櫛描波状文と櫛描斜め刺突文列を交互に施すもの。

無文タイプ：文様がないもの。

パレススタイル壺：赤彩のあるもの。

以上の分類により太頸壺Aと太頸壺Bについて検討したのが表7・表8である。ここでは、櫛描直線文だけのもの、櫛描波状文だけのもの、斜め刺突文列だけのものはこの分類の中に含めていない。また櫛描扇形文列・櫛描簾状文・円形刺突文列も重要な文様と思われるが分類には含めていない。

まず、太頸壺Aでは、直・波タイプが前葉の遺構に13点、中葉の遺構に4点、後葉の遺構に7点、不明の遺構に4点がある。前葉の遺構から出土した頸部形態丸みタイプで体部形態下位のもの・やや下のもの・中の下のもの・中の上のものが10点、頸部形態直立タイプで体部形態中の下のもの・中の上のものが3点あり、直・波タイプは頸部形態丸みタイプのものに多い。また後葉の遺構から出土した口縁部形態強い外反タイプで体部形態やや下のものが4点あり、外反タイプで中の下のもの1点、やや立ちタイプでやや下のもの1点、中の下のもの1点とあわせて後葉の遺構から出土したものも一定量みられる。直・波・刺タイプは前葉の遺構に1点、後葉の遺構に7点、不明の遺構に10点の出土があり、後葉の頸部形態やや立ちタイプで体部形態やや下のものが3点と不明の遺構から出土したもので頸部形態丸みタイプで体部形態中の下のもの3点、頸部形態外反タイプで体部形態やや下のもの・中の下のもの・中の上のものが7点あることから、時間的変遷はあまり明瞭ではない。無文タイプは前葉の遺構に6点、中葉の遺構に7点、後葉の遺構に13点、不明の遺構に10点あり、全時期にあるが後葉の遺構に多くみられる。後葉の遺構出土の頸部形態直立タイプで体部形態やや下のものが4点、不明の遺構では頸部形態外反タイプで体部形態中の上のもの5点がある。

太頸壺Bでは、直・波タイプが前葉の遺構に4点、中葉の遺構に7点、後葉の遺構に2点、不明の遺構に2点がある。前葉と中葉の遺構から出土したものが多く、頸部形態丸みタイプ・直立タイプ・やや立ちタイプで体部形態中の下のもの・中の上のものが多く、中葉の強い外反タイプでやや下のもの1点、後

葉のやや立ちタイプで中の下のもの1点もみられる。直・波・刺タイプは前葉の遺構に2点、後葉の遺構に8点の出土がある。後葉の全ての頸部形態で少数みられるが前葉の頸部形態丸みタイプ・やや立ちタイプにも各1点みられる。無文タイプは、前葉の遺構に11点、中葉の遺構に15点、後葉の遺構に29点、不明の遺構に6点の出土がある。全時期にあるが中葉と後葉の遺構に多くみられる。特に前葉の遺構出土のものと比べて、中葉と後葉の遺構では、頸部形態やや立ちタイプで体部形態中の下のもの・中の上のものが17点、頸部形態外反タイプで体部形態中の下のもの・中の上のもの12点があり、中葉以後に太頸壺Bの無文タイプの主要な形態となる。

(3) 赤彩と体部上半の文様構成の関係

文様と関係する要素として赤彩の有無やその範囲、赤彩文様などがある。赤彩文様では円形文や波状文、縦帯文、山形文などがあり、部分赤彩では内面口縁部・外面頸部から口縁部・外面体部中央から下半などの範囲のものがみられる。

器形を検討した太頸壺A89点、太頸壺B88点のうち、赤彩されたものは太頸壺Aが16点、太頸壺Bが11点で、パレススタイル壺は抽出

した土器の中では14.4%程であった。太頸壺Aでは前葉が2点、中葉が3点、後葉が4点、不明5点ある。その中の文様構成は、前葉では直・波タイプが1点、無文タイプが1点、中葉では直・波タイプが2点、無文タイプが1点、後葉では直・波・刺タイプが4点、不明では直・波タイプが1点、直・波・刺タイプが4点ある。

太頸壺Bでは前葉が2点、中葉が2点、後葉が6点、不明が1点ある。その中の文様構成は、前葉では直・波タイプが1点、直・波・刺タイプが1点あり、中葉では直・波タイプが2点、後葉では直・波タイプが1点、直・波・刺タイプが4点、無文タイプが1点、不明の遺構では直・波タイプが1点、無文タイプが1点ある。赤彩される太頸壺A・太頸壺Bは全時期で見られるが、後葉の遺構出土のものが少し多い。文様構成においても全時期に直・波タイプと直・波・刺タイプ、無文タイプがみられるが、前葉・中葉では直・波タイプが主体で後葉では直・波・刺タイプに主体が移る。太頸壺A・太頸壺Bで無文タイプは2点あるが、文様があるものに比べて少ない。

(4) 赤彩のある太頸壺とない太頸壺の関係

さて、赤彩のある太頸壺、パレススタイル壺と赤彩のない太頸壺との関係、使い方の違いな

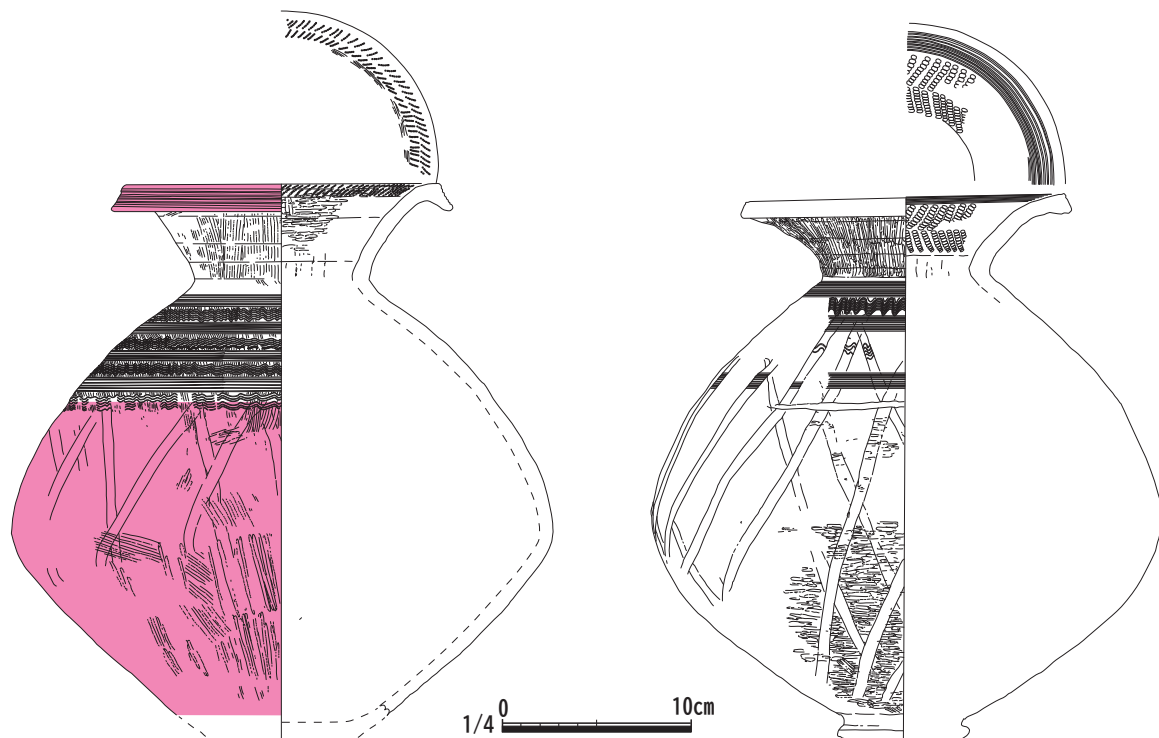


図4 赤彩された太頸壺A（パレススタイル壺）と無彩の太頸壺Aのカゴ目土器（1：4）

どが存在したのであろうか。先に述べたように朝日遺跡出土の残存状態が良いものの中では14.4%の太頸壺で赤彩が施されており、赤彩されたパレススタイル壺は太頸壺の中では少数派である。また、先学の研究において指摘されているように、尾張地域を中心に分布するパレススタイル壺は、土器全体に赤彩されたものも少数あるが、多くは文様がある部分を外した部分に赤彩が施されている（浅井 1986・1987、村木 2004）。

図 4 に示した県報告第 44 区の南環濠 SD178 の内側付近の基盤直上の遺物包含層から出土したパレススタイル太頸壺 1281 と県報告第 71 区の北環濠 SD366 出土の太頸壺 566 がある。2 点とも口縁部径 16.3cm ～ 16.5cm で器高 29.0cm ～ 29.5cm のほぼ同規模の土器で、外面の赤彩の有無と口縁部端面の形状と凹線文の有無の違いがあるものの、外面の体部上半と内面口縁部の文様構成は類似している。興味深いことに外面体部にはどちらも土器を吊るした紐で編んだ粗いカゴ目痕が残る。

出土地点は南集落と北集落と異なるが、生活遺構などからの出土のものと思われ、カゴ目痕からは建物内部などに吊るして使用されたものと考えられる。壺の形状からは液体状・粒状の物質を入れていたことが想定される。

パレススタイル土器の出現は小型の壺、高杯、器台から赤彩土器が現れ、赤彩土器が多く使われるようになって大型の壺に赤彩されたものが現れる傾向が指摘されている（北村 1987・村木 2004）。また高杯などでは、多様な形態がある中で、赤彩されたものと赤彩がないものがあり、方形周溝墓などの墓からの出土状況から、日常の土器使用において差別化・差異化を示すものとして赤彩土器が使用されたものとの指摘がある（村木 2004）。一方で、方形周溝墓の墓域のみならず、竪穴建物や土坑、環濠などの溝からの出土も多く、使用状況の差異化の目的が何かという問題がある。以上の状況を鑑みると、この 2 点の形態・使用状況の類似する壺のあり方は使用者の社会的位置付けなどの反映もあるが、使用される対象との関係が関わるのではないであろうか。赤彩されたパレススタイル壺が少数派の特別な存在（必ずしも集落構成

員ではない）に対応する壺、多数派の太頸壺が一般集落構成員に対応する壺と考えておきたい。

6. パレススタイル壺・太頸壺のデザイン

最後に前章までに述べてきた弥生時代後期の太頸壺の器形変化の背景について検討し、パレススタイル壺のデザインについて私見を述べ、現在進めている『パレススタイル土器を作ろう』における鑑賞法への視点を提示したい。

(1) 太頸壺の器形変化とその背景

弥生時代後期の太頸壺の形態について、次の 4 つの傾向が確認できた。

①前葉において太頸壺 A の頸部形態丸みタイプで体部形態やや下のもの・中の下のもが多く、頸部形態丸みタイプ・直立タイプ・外反タイプで体部形態中の上のものが前葉から中葉にかけて比較的存在すること。

②後葉の太頸壺 A において頸部形態直立タイプ・やや立ちタイプ・外反タイプ・強い外反タイプで体部形態やや下のものや中の下のもが多くみられること。

③太頸壺 B のにおいて前葉の頸部形態丸みタイプ・直立タイプで中の下・中の上のものから、中葉を経て後葉の頸部形態やや立ちタイプ・外反タイプで体部形態中の下・中の上のものへの変化があること。

④太頸壺 B においても後葉に外反タイプで体部形態やや下のものが比較的にみられること。

①と③、②と④は弥生時代後期の太頸壺 A と太頸壺 B で表れ方の強弱があり少し異なるが、同様の形態変化であり、頸部形態の変化は、体部上半の文様構成の直・波タイプから直・波・刺タイプへの変化ともおおそ対応して、その時間的変遷が推定される。一方、体部形態では太頸壺 A の傾向②は、太頸壺 B の傾向である③とは体部形態において反対の変化である。

さて①と③の傾向は、弥生時代中期後葉後半の太頸壺の器形である頸部形態丸みタイプ（直立タイプ）で体部形態やや下のもの・中の下のものから、これまで弥生時代後期の太頸壺の器形としての断面形ソロバン玉形といわれる体部最大径の位置が高くある器形への変化と対応する。そして②と④の傾向は、古墳時代前期にお

ける太頸壺で口縁部 c・口縁部 d で、体部最大径が体部下半にあるいわゆる下膨れ状器形の成立ともつながる変化として認識でき、体部上半の文様構成の変遷と関連付けて説明されてきた東海地域の地域色とされてきた特徴にあたる。

①と③は、朝日遺跡の所在する愛知県尾張地域における土器作りの内在的变化の可能性もあるが、太頸壺 B の体部上半無文タイプが多い点を考慮すると、その背景として近畿地域において弥生時代後期にみられる壺（太頸壺、あるいは広口壺）の無文化傾向と体部形態における体部最大径の位置が比較的上位にあるものがみられることと関係があらうか⁽²⁾。このように考えてよければ、口縁部形態 b の存在や底部形態突出底・やや突出底が比較的にみられることとも関係する要素と考えられる。そして無文化した太頸壺 B の中葉・後葉における形態変化は体部上半に文様を施すものと相互に影響しており、中葉・後葉における櫛描文を体部上半に施す太頸壺 A・太頸壺 B にも変化を与えた。

(2) パレススタイル壺のデザイン

以上の検討結果から、現在のあいち朝日遺跡ミュージアムの常設展示にあるパレススタイル壺を観察したい。写真 1 の右側にあるのは県報告の第 58 区 SX117 から出土した太頸壺 A (421)、写真 1 の左側にあるのは県報告第 72 区 SD367 出土の太頸壺 B (577) である。2 点の太頸壺は体部下半に赤彩があり、太頸壺 A (421) は口縁部端面に帯状の部分赤彩が、太頸壺 B (577) の体部上半には大胆な波状文の赤彩がみられるもので、どちらも体部上半の文様構成は直・波・刺タイプにあたる。

本分析では太頸壺 A (421) は頸部形態外反



写真 1 あいち朝日遺跡ミュージアム展示パレススタイル壺

タイプで体部形態やや下のもの、口縁部 b で平底、太頸壺 B (577) は頸部形態やや立ちタイプで体部形態中の上のもの、口縁部 b でやや突出底に分類している。出土した遺構の時期は SX117 は他に共伴して報告されている資料がないことから不明の遺構⁽³⁾、SD367 が古墳時代前期にかかる土師器も出土する遺構であることから後葉の遺構としている。

本分析を実施した感想からは、この 2 点の太頸壺は前葉の遺構に主体である頸部形態丸みタイプではないこと、体部形態において太頸壺 A (421) は先に検討した太頸壺 A の体部形態の傾向②と太頸壺 B (577) は外面体部上半無文の太頸壺 B の体部形態の傾向③を反映したものと考えられる。

つまり、この 2 点のパレススタイル壺は弥生時代後期の朝日遺跡において、異なる傾向②・③を反映した一定期間の形態変化を経たデザインと思われるのである。

(3) 弥生のデザインと現在の鑑賞

最後に弥生のデザインと現在の鑑賞との関係について考えたい。

先に述べてきたパレススタイル壺、太頸壺の器形などへの傾向やデザインとは、弥生時代の人々の営みの中で、土器作り・土器の使い方が反映されたものであり、その当時の人々の望まれた姿と考えられるものである。一方で現在の我々の弥生土器、パレススタイル土器の鑑賞は、資料との五感を通した観察・対話・学習が反映されたものであり、その指向性は実際の使用・消費を体験しない美意識の中にあるものと思われる。

この弥生のデザインと現在の鑑賞への指向性をつなぐものとして、現在各地で実施されている「対話型鑑賞」法⁽⁴⁾などが有効と思われる。発掘調査により出土した資料のより深い理解や新しい見方を見い出していく方法として、また多数収蔵されている資料を掘り起こしていく方法としての活用が望まれる。

本論はあいち埋文サポーターズクラブの担当として令和 6 年度から「パレススタイル土器を作ろう」ワークショップの活動を通じた体験と令和 7 年度の夏に三重県いなべ市にある桐林館

における対話型美術鑑賞法のワークショップ体験をもとに辿り着いた少しばかりの成果である。愛知県陶磁美術館の岩渕 寛氏、あいち朝日遺跡ミュージアムの松本 彩氏、あいち埋文

サポーターズクラブのサポーターの皆さま、桐林館の夏目文絵氏、成安造形大学の高橋七生氏には記して感謝の意としたい。

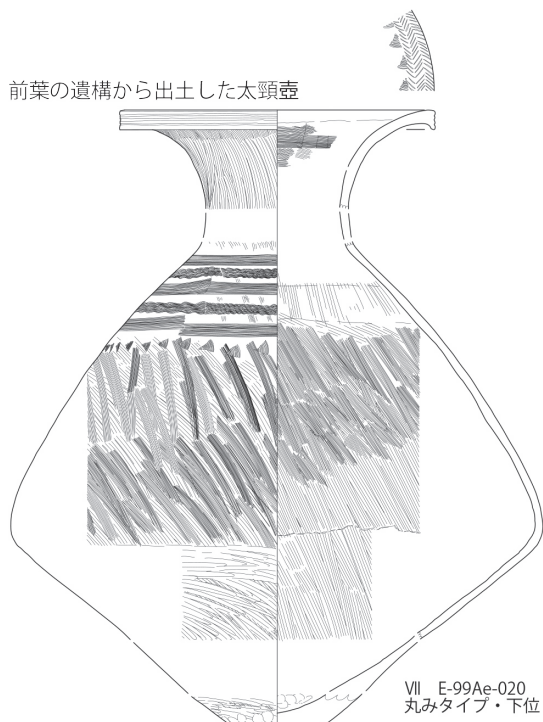
註

- (1) 本分析で主に引用した朝日遺跡報告書で、本文・図の中にある「Ⅰ」・「Ⅱ」・「Ⅲ」・「Ⅳ」・「Ⅴ」・「Ⅵ」・「Ⅶ」・「Ⅷ」は各報告書によるものである。Ⅰ報告：加藤安信編 1982『朝日遺跡Ⅳ（土器図版篇）』愛知県教育Ⅴ報告：宮腰健司編 1994『朝日遺跡Ⅴ（土器編・総論編）』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 34 集 財団法人愛知県埋蔵文化財センターⅥ報告：宮腰健司編 2000『朝日遺跡Ⅵ新資料館地点の調査』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 83 集 財団法人愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センターⅦ報告：蔭山誠一編 2007『朝日遺跡Ⅶ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 138 集 財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センターⅧ報告：赤塚次郎編 2009『朝日遺跡Ⅷ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 154 集 財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター
- (2) 近畿地域の太頭壺については、森岡秀人 1990「山城地域」『弥生土器の様式と編年一近畿編Ⅱ』木耳社と兼康保明 1990「近江地域」『弥生土器の様式と編年一近畿編Ⅱ』木耳社などを参考にした。
- (3) 宮腰健司 1998「朝日遺跡における弥生時代後期方形周溝墓の変遷」『財団法人愛知県埋蔵文化財センター年報 平成 9 年度』財団法人愛知県埋蔵文化財センターにおいて、Ⅰ報告太頭壺 A (421) の出土した SX117 は方形周溝墓 SZ110 にあたり、弥生時代後期の 4 期の遺物（「山中式土器」として典型的な土器様相が確立された時期）として扱われている。
- (4) ここでいう対話型鑑賞法は、1980 年代のニューヨークの近代美術館（MoMA）で教育部長を務めていたフィリップ・ヤノウィーンと認知心理学者のアビゲイル・ハウゼンらによって開発された方法で、グループで対話を重ねながら美術作品を読み解いていく美術鑑賞の手法とされる。日本では京都芸術大学のアート・コミュニケーション研究センター（ACOP）で福のり子等によりはじめられたものである。対話型鑑賞に関しては、松村淳子 2024「対話型鑑賞」に対する批判—課題点の整理—『名古屋芸術大学研究紀要第 45 巻』名古屋芸術大学 を参考にした。美術に関する対話型鑑賞法についての提唱と各地における導入の経緯やその評価が紹介されており、現状における問題提起がなされている。

引用・参考文献

- 濱田耕作 1929「日本の古代土器」『史前学雑誌』第一巻第四號 史前學會
- 森本六爾 1934「彌生式赤色塗彩土器」『考古学評論第一巻第一號 日本原始農業新論』東京考古學會
- 小林行雄 1939「第七 伊勢湾地方及び琵琶湖地方」『弥生式土器聚成図録正編（解説）』東京考古学会 66-81 頁
- 大参義一 1968「弥生式土器から土師器へ—東海地方西部の場合—」『名古屋大学文学部研究論集（史学）47』
- 浅井和宏 1986「く宮廷式土器」について『欠山式土器とその前後』第 3 回東海埋蔵文化財研究会
- 浅井和宏 1987『パレススタイル壺』小考『マージナル No.7』愛知考古学談話会
- 石黒立人 1987「高蔵式から山中式へ」『欠山式土器とその前後 研究・報告編』第 3 回東海埋蔵文化財研究会
- 赤塚次郎 1990「廻間式土器」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 10 集 財団法人愛知県埋蔵文化財センター
- 赤塚次郎 1992「山中式土器について」『山中遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 40 集 財団法人愛知県埋蔵文化財センター
- 赤塚次郎 1993「山中式という名のデザイン」『考古学フォーラム 3』考古学フォーラム
- 永草康次 1992「朝日遺跡出土の土器胎土」『朝日遺跡Ⅱ（自然科学編）』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 31 集 財団法人愛知県埋蔵文化財センター
- 車崎正彦・松本 完・藤根 久・菱田 量・古橋美智子 1996「土器胎土の材料—粘土の期限を中心に—」『日本考古学協会第 62 回大会研究発表要旨』
- 藤根 久 1998「東海地域（伊勢一三河湾周辺）の弥生および古墳土器の材料」第 6 回東海考古学フォーラム岐阜大会『土器・墓が語る』
- 赤塚次郎 2001「濃尾平野における弥生時代後期の土器編年」『八王子遺跡 考察編』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 92 集 財団法人愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター
- 永井宏幸・村木 誠 2002「尾張地域」『弥生式土器の様式と編年 東海編』木耳社
- 村木 誠 2002「パレススタイル」『弥生式土器の様式と編年 東海編』木耳社
- 宮腰健司 2004「濃尾地域における山中式の成立」『山中式の成立と解体 伊勢湾岸における弥生時代後期を巡る諸問題』第 11 回東海考古学フォーラム三重大会実行委員会
- 村木 誠 2004「人を序列化するしくみ—パレススタイル土器群の検討—」『考古学研究 51-2』考古学研究会
- 堀木真美子 2008「パレススタイル土器の赤色顔料」『愛知県埋蔵文化財センター研究紀要第 9 号』愛知県埋蔵文化財センター
- 宮腰健司 2016「柳ヶ坪型土器」について『研究紀要第 17 号』公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
- 白川美冬 2026「朝日遺跡出土パレススタイル土器群の基礎的研究」『あいち朝日遺跡ミュージアム研究紀要第 5 号』あいち朝日遺跡ミュージアム

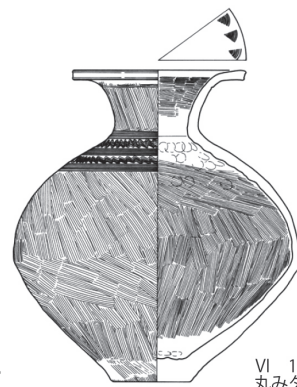
前葉の遺構から出土した太頸壺



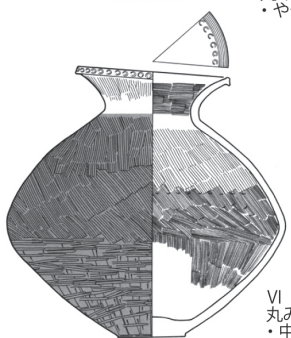
VII E-99Ae-020
丸みタイプ・下位



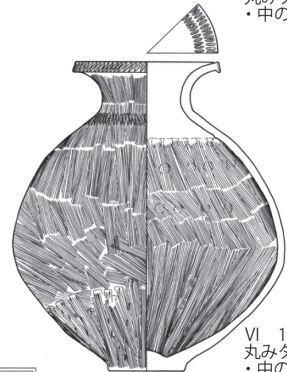
VI 1956
丸みタイプ
・やや下



VI 1950
丸みタイプ
・中の下



VI 1874
丸みタイプ
・中の上



VI 1875
丸みタイプ
・中の下

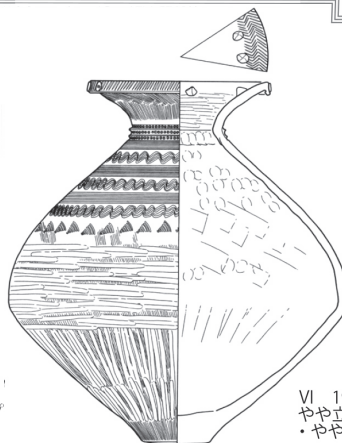
中葉の遺構から出土した太頸壺



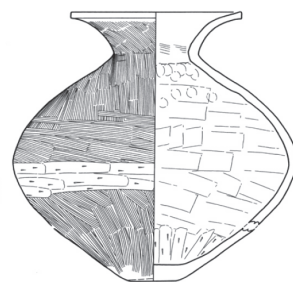
VII E-01Aa-398
丸みタイプ・中の下



VI 1846
直立タイプ
・中の下

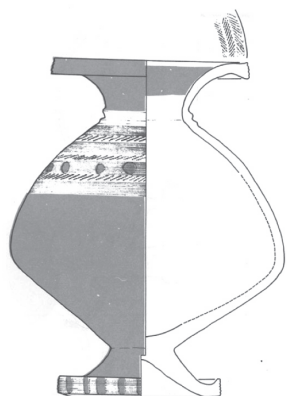


VI 1931
やや立ちタイプ
・やや下

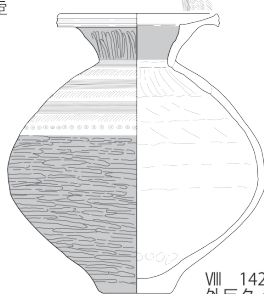


VI 1932
外反タイプ
・中の上

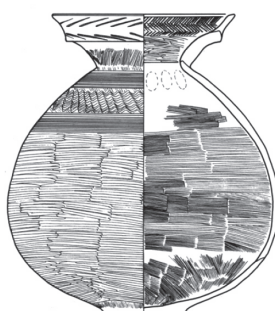
後葉の遺構から出土した太頸壺



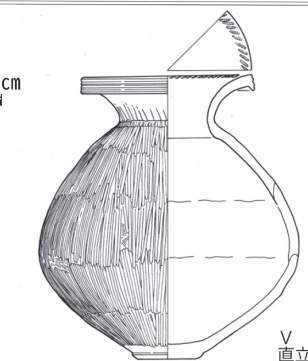
V 567
やや立ちタイプ
・やや下



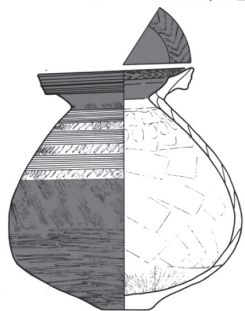
VIII 142
外反タイプ
・中の上



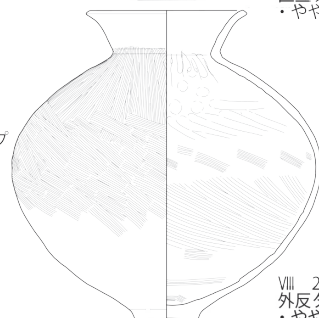
V 1693
強い外反タイプ
・やや下



V 983
直立タイプ
・やや下



V 1348
強い外反タイプ
・やや下

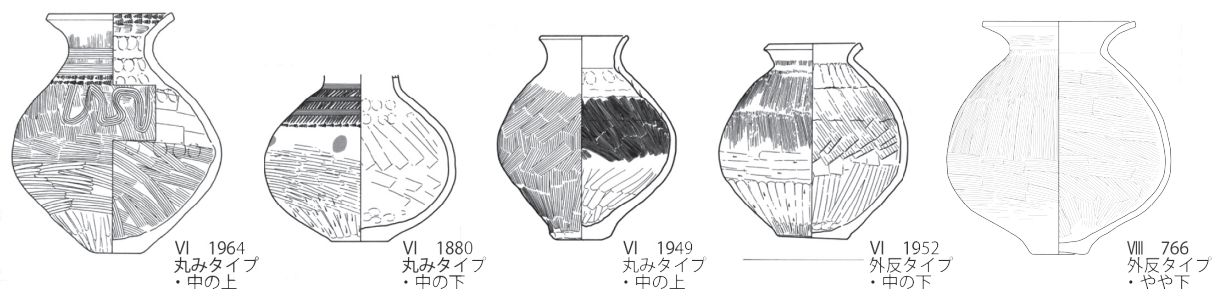


VIII 231
外反タイプ
・やや上

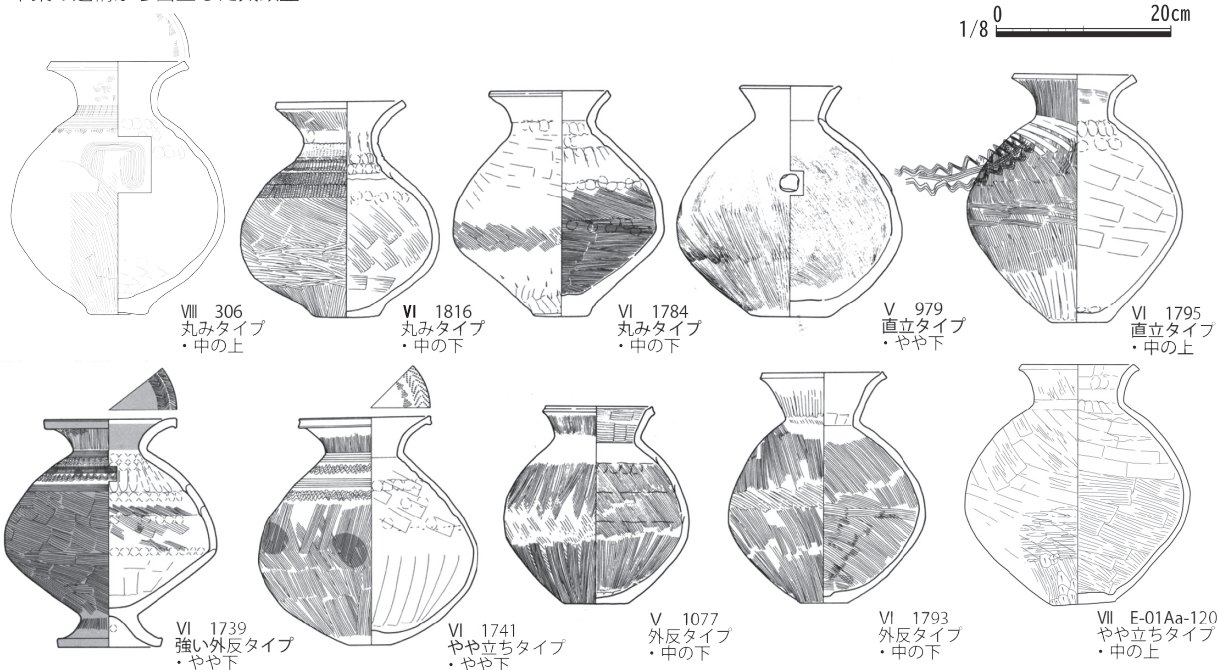
図5 弥生時代後期における太頸壺Aの形態変化 (1:8)

1/8 0 20cm

前葉の遺構から出土した太頸壺



中葉の遺構から出土した太頸壺



後葉の遺構から出土した太頸壺

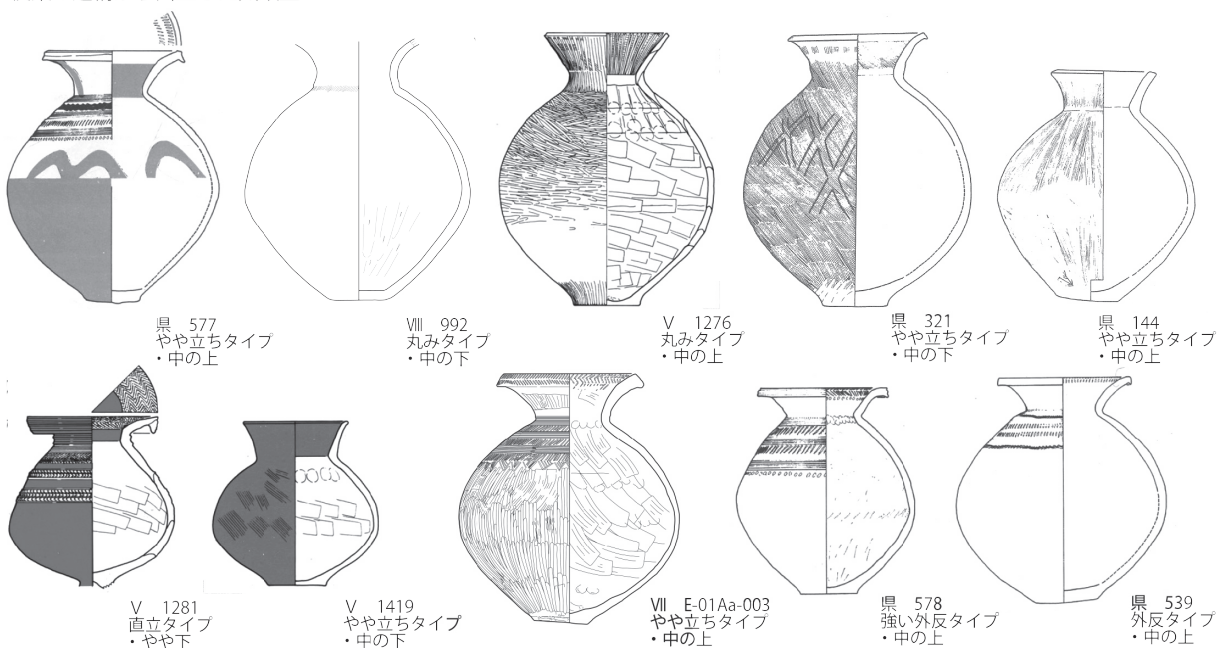


図6 弥生時代後期における太頸壺Bの形態変化(1:8)